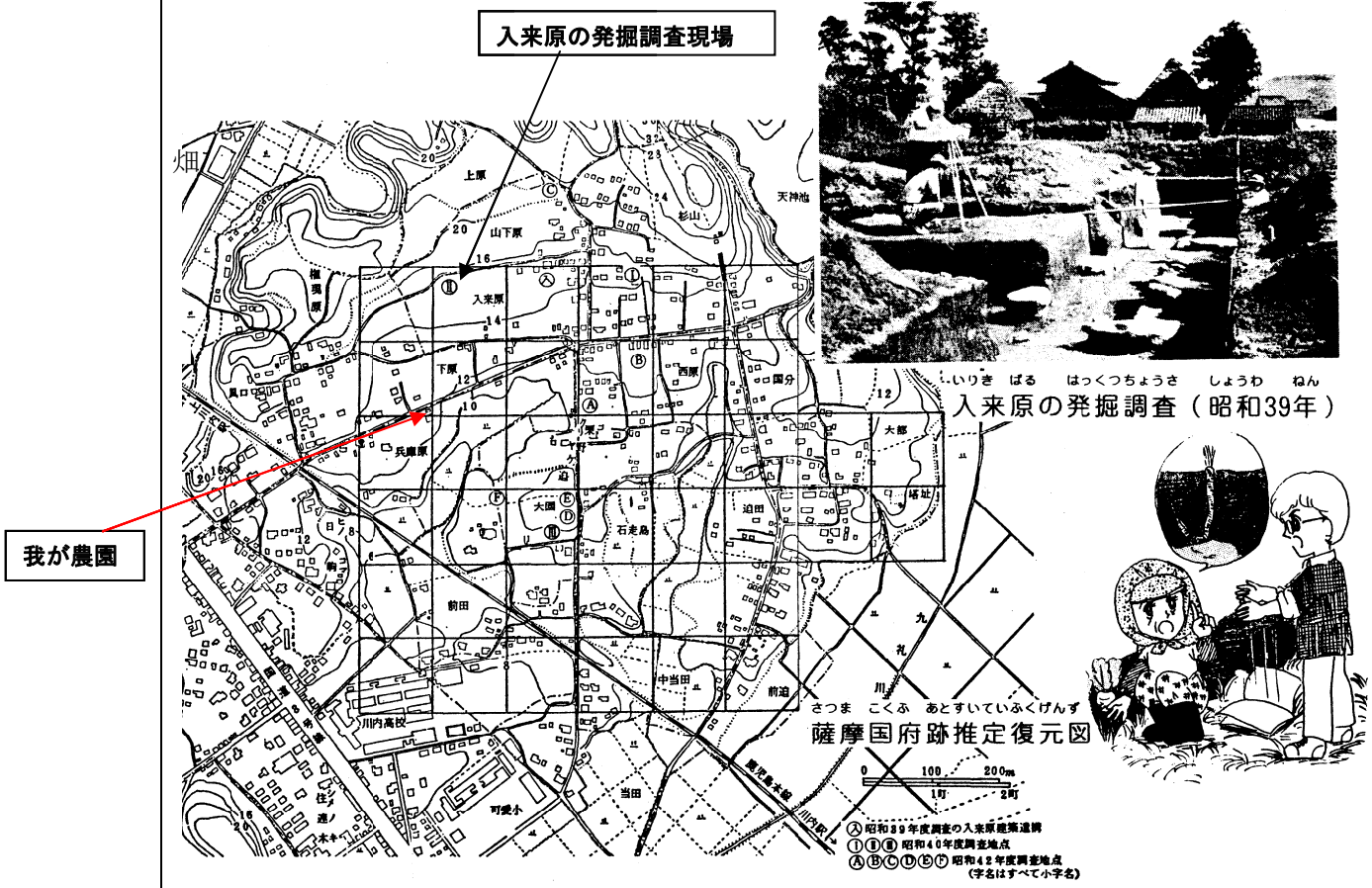
“コボウの曲がり”から始まるお話

川内高校の平田先生と同僚の先生たちは，暇を見つけては国府域と推定される地域を歩き周囲の観察を重ね，古瓦などが出ないか聞き込みに努めていました。年も改まった東京オリンピック開催の昭和３９年（1964）２月末，一人の農婦（西原敬二の妻西原トキ）の話にぶつかりました。

「瓦は出もはんどん，一間ばっかいおきに，石がいかっとっどゃなかんそかい。そこばっかいゴボウが曲がって出てきもしと。」（＝瓦は出ませんが，一間間隔で石が埋まっているのではないでしょうか。そこだけゴボウが曲がって出てくるのですけど」）

平田先生たちは，近くの建設現場から鉄筋を借用してきて，農婦の示す畑の中に鉄筋を打ち込んでみると，地下６０㎝程で固いものにぶつかりました。東西方向に８尺（２．４m）間隔で５個，南北は７尺（２．１m）間隔で４個。「この畑に国府関連の建物の礎石があるに違いない」

もう単なる推定ではなくなりました。平田先生は急いでこれまでの成果をまとめ専門家の意見を求め，九州大学の鏡山猛教授，玉竜高校の河口貞徳先生（鹿児島県考古学会長）の指導のもと，川内高校による発掘調査が実現しました。春と夏の休みに行ったわずか３週間の発掘調査でしたが，これが薩摩国府跡発見と，その後の薩摩国分寺跡発掘調査へと続く長い調査のスタートでした。



川内市歴史資料館開館１０周年記念特別展―よみがえる古代　薩摩国府・国分寺発掘３０周年展―解説書

平成６年（1994）７月２１日発刊から抜粋